

□ 県内唯一の四年制大学

先般、視聴者の願いを探偵役のタレントが叶えてあげるというテレビ番組を見ていたところ（朝日放送「探偵！ナイトスクープ」）、我が鳥取大学の女子学生が依頼人として出演していた。彼女達の願いは、「『本当の』合コンというものを経験してみたい」というものであった。鳥取県内には鳥取大学以外に女子短大が一枚あるだけであり、女子学生が他大学の学生と合コンするのはほとんど不可能だったのである。私は、この県内唯一の四年制大学に赴任して三年になる。

鳥取大学は、教育・農・工・医の四学部と教養部からなっている。学部構成を見てわかるように、応用・実学系の大学であり、かつ、理科系に偏った編成の地方・国立・総合大学である。学生の収容定員は院生を含めて五千名強、教職員数

千六百名強である。学生の出身地を見ると、県内は教育学部で七割、他の学部は二割前後、全学的には中国・近畿で約八割を占めている。工学部では近畿圏が四割を占め、ここでは関西弁が「共通語」になっているそうである。

□ ナシと砂丘

さて、鳥取大学は、他の地方国立大学と多くの共通性をもつが、あえて特徴を挙げれば、どういうことになるであろう。鳥取といえば二十世紀ナシ。このナシの研究、開発には、鳥取大学とその卒業生が大きな寄与をなしているという。地域性の強い農業などを中心に、人材供給を含め、大学が地域社会、産業と結びついているのが一つの特徴であろう。

次に、鳥取といえば鳥取砂丘、その一角には全国共同利用施設の「乾燥地研究センター」があり、中国、メキシコなど

を対象に乾燥地の緑化と農業開発研究がおこなわれている。地域社会と結びつきながら、グローバルな問題の解決にも寄与している点がもう一つの特徴と言えるう。

□ キャンパス自慢

キャンパスは、医学部のみ米子市に、その他の学部と大学本部は鳥取市の西郊、湖山地区にある。湖山キャンパスは湖山池（周囲十六キロ）に突き出した丘の上にある。湖山池を見おろし、遠くに日本海を望めるキャンパスは、かなりゆつたりとしたつくりで、農場では牛や羊の声がし、鶯や雉、狸も出没する。キャンパス内の一角の林には、前方後円墳もある。湖山キャンパスに移転後、すでに三十年程経つので、市民には湖山といえば学生・大学の町というイメージが定着している。移転当初農村地帯であった湖山周辺にも、次第に日常の用を足せる商店やスーパーなどができ、近年の郊外型大型

店舗の進出によって、市の中心部よりかえって便利との声も聞かれるようになった。かくして、学生、教官の多くは湖山町とその近辺に居住し、職住接近の生活を送っている。その学生にとつての効用は、教官の多くが毎日大学に来ており、授業以外の場でも丁寧な指導が受けられるという点であろう。

□ 学生の不満

大学設置基準の改変に伴って、学生に言わせれば地味でのんびりした鳥取大学でも、教養部廃止、一般教育の見直しを中心とする大学改革が進められている。改革にあたって、全学委員会は、在学生及び卒業生に対する大規模な意識調査をおこなった。（調査結果は四分冊の報告書と「鳥取大学の現状と課題」（平成五年度）にまとめられている。）この一部を紹介してみる。

まず、学生生活の充実度に関するものを見てみると、教育条件に関する不満は、

「文化系学部・学科がない」「カリキュラムの自由度が少ない」「図書館や学生会館が貧弱」（いずれも二〇％強）に集中している。逆に「少人数講義が少ない」という不満は二・七％に過ぎなかった。

「文化系学部・学科がない」という不満は、地元の、そして教員の不満と共通している。設置に向けて模索がおこなわれてきたが、うまくいっていない。

「カリキュラムの自由度」については、実学系大学の宿命のといった観もあるが、一般的大学のイメージ（自らが選択して主体的に学ぶ）と現実の落差を表しているようにも思える。少人数教育に対する不満が少ない点と考え合わせると、学生が比較的少人数で教官にみっちり絞られている姿がイメージされる。

福利厚生面での不満を問う設問では「キャンパスにおもしろさ・楽しさが乏しい」が二七・七％あった。「図書館や学生会館が貧弱」という点と重ね合わせ

てみると、「特に理系中心の本学に一番欠けたもの」すなわち「大学らしい雰囲気」の欠如ということになるであろうか。学生の鳥取と鳥取大学にたいするイメージは、概ね自然豊かでのんびりしているが何もない、つまり文化的刺激に乏しいという点で共通する。この点での魅力はどうつくっていくのか、ということが一つの課題になっているのだろう。

□ 大学への期待

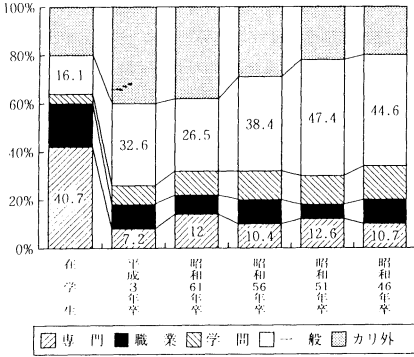
調査では、在学生が大学生生活に最も期待していること、卒業生が在学生に最も期待することを問うている。この結果をまとめたのが図である。なお「専門」は「専門的知識」、「一般」は「教養」および「総合的に判断する力」、「学問」は「学問にとりくむ姿勢」を身につけたいまたは身につけて欲しいといったことを示している。

特徴を要約すると、在学生の意識としては、大学教育の中心は専門・職業教育

□ 教養部廃止とカリキュラム改革

であるが、卒業後は、一般教育に関わる「教養」や「総合的判断力」といった能力の重要性が、次第に認識されてくるということであろう。そして、この結果から言えるのは、一般教育の重要性が社会においては認知されているにも関わらず、大学において、学生をこれへと動機づけることの困難さである。

図 大学に何を期待するか (経年変化)



『鳥取大学の現状と課題』より

以上のような調査と並行して、現在大学の組織改革とカリキュラム改革が進展中である。簡単に概要を記しておく。

一九九一年六月学長の諮問機関として全学委員会が発足し、「一般教育のあり方」および「教養部制度の見直し」を検討、九二年に答申を出した。内容には、①一般専門の積み上げ型カリキュラムの廃止と四ないし六年を通じての一貫教育、

②一般教育のための権威ある全学協議機関の設置、③一般教育の科目区分の変更、「教養」(この内部をさらに「一般」「特定」「総合」に区分)、「共通基礎」(語学、健康スポーツ)、「専門基礎」(科目、取得単位数の変更)、⑤教養部の廃止と文化系新学部の設置がもられていた。

新カリキュラムについては、すでに九三年度から実施されている。組織改革については、新学部構想は九二年度概算要求が通らなかつた時点であつさり放棄され、その後、各学部の再編・拡充と教養部教官の分属という方向で、本年度概算

要求に向けて最終的なツメがおこなわれている。したがって、教養部は未だ存続して一般教育の責任を担っており、専門教育も含めた改革カリキュラムの編成とその本格的実施は今後の課題となっている。

改革にあつては、一般教育の重要性の確認、一般教育は全学の教官がこれにあたること、分属にあつては教養部教官の意向を尊重すること、といった積極的な原則が提示されている。しかし、たとえば一般教育に「専門基礎」を含めたため見かけ上の単位数よりも一般教育は削減されていること、改革に関する情報の風通しが悪いこと等、問題点も多い。「教養部の留年規定をなくすだけで、ことは済んだのではないか」「どこがどうよくなるんだ、会議の議題と授業負担が増えるだけ」といった声も聞かれる中、教養部廃止後の、一般教育の実施体制、予算、建物の管理、事務組織等、なまぐさい話も含めて、現在検討中である。

(やまね・としき)